▼特集

冷戦期の住宅建設・都市開発：西ドイツとチェコスロヴァキア

——社会経済史学会第八八回全国大会——

二〇一九年五月一八日・一九日に青山学院大学を会場に社会経済史学会第八八回全国大会が開催された。その一日目に、永山のどかを組織者として、パネル・ディスカッション「冷戦期の住宅建設・都市開発——西ドイツとチェコスロヴァキア——」を行った。当日のプログラムは次の通りである。

趣旨説明：　永山のどか（青山学院大学）

報告1：　芦部　彰（東京大学）

「一九五〇年代～六〇年代の西ドイツにおける住宅団地建設」

報告2：　森下嘉之（茨城大学）

「冷戦初期（一九五〇年代）チェコスロヴァキアの住宅団地建設——モデル団地としてのオストラヴァ都市開発における包摂と排除——」

報告3：　永山のどか

「一九五〇年代西ドイツにおける東独出身者のための住宅建設——シュツットガルト市の事例——」

コメント1：　黒岩いずみ（青山学院大学）

コメント2：　河合信晴（広島大学）

（司会：北村陽子（名古屋大学））

本特集は、報告者三名が当日の報告内容に基づいて加筆・修正した原稿から成り立っている。

◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇

趣旨説明

永山のどか

第二次世界大戦後の西欧諸国と東欧諸国の経済社会を概観する場合、経済成長の時期や長さの違い、生産性の違いなど、数十年間の経緯の違いが指摘されている。近年では、旧東ドイツの団地における縮小政策についての研究が日本においてもなされ、冷戦後における東西の相違点が指摘されている。また、都市計画・住宅政策・住宅建設において、戦後、東西両ドイツが競合していた点が「システム競争」という視点から議論されている（Thomas Großbölting u. Rüdinger Schmidt (Hrsg.), *Gedachte Stadt - Gebaute Stadt. Urbanität in der deutsch-deutschen Systemkonkurrenz 1945-1990*, Köln 2015)。

しかし、住宅建設や都市開発に着目した場合、東西両陣営の主要諸国では都市周辺部や工業地域で公的な色合いの強い集合住宅建設が積極的に進められており、数十年間を通じての共通点もみられる。また、チェコスロヴァキアの社会主義期の住宅団地をみると、そこには「社会主

義期のパネル工法の高層団地」としてひとくくりにできないような多様性が確認される。多様性は西側陣営にいた西ドイツにもみられる。本特集では、体制間の相違点だけでなく共通点、また、それぞれの体制内の同質性だけなく多様性に着目しつつ、個別の住宅団地を対象にして、それらの住宅団地が冷戦特有の諸事情・諸特徴とどのように関係し、もしくは、していなかったのか、という点を主として以下の三つの視角から考察していきたい。

第一に、一九五〇年代という時代性への着目である。本特集の三論文が分析対象とするのは主として一九五〇年代である。一九五〇年代は、東西両陣営とも、経済成長を遂げた時期であり、また、社会主義陣営、資本主義陣営という、それぞれの政治・経済・社会体制の安定化・強化が目指された時期である。体制の安定化・強化は、住宅建設や都市開発においてもみられ、それは西ドイツでは、マーシャルプランの見返り資金を用いたモデル団地建設や、永山の論文が明らかにするように、東ドイツから脱出した人たち、つまり東独難民への優遇措置にみられた。住宅建設を通しての体制の安定化はどのように図られ、それは、当時、同じく住宅不足に悩んでいた西ドイツの一般住民とのどのような利害の調整のもとなされたのだろうか。住宅建設による体制安定化・強化の一方で、芦部の論文が明らかにするように、東西の境界を越えて住宅団地のコンペがなされることもあった。また、森下の論文が明らかにするように、戦前に機能主義的建築を学んだ建築家が戦後の住宅計画に関与し、その過程の中で社会主義リアリズムに傾倒していくこともあった。住宅建設・都市開発を通して一九五〇年代の時代性を考察した場合、そこにはその前の時代の影響や東西の共通点がどのようにみられ、なぜ、そのような連続面・共通点がみられたのだろうか。東西の共通点は、たとえば、一九五〇年代の西ドイツとチェコスロヴァキアのモデル団地の間取りにもみられる。一九五〇年代前半の西ドイツのＥＣＡモデル団地事業での住宅の間取りと、森下の取り上げるオストラヴァ・ポルバ団地を比較すると浴室が付いている点、居間が台所と分離している点、また、充実した住宅設備に比べて面積が小さい点に共通点がみられ、居住に込められた思いに共通性があることが推測される。

第二に、住宅建設・都市計画に込められた、理想の社会・家族・人物像への着目である。芦部の扱うフェンプール計画や、森下の扱うオストラヴァ団地建設は、モデル住宅としての性格が強く、あるべき住宅像、あるべき住民像、家族像が念頭におかれていたように思われる。そのような理想は冷戦を反映したものだったのか、なかったのか。反映していない場合、その理想像はどのように普遍化されたものだったのだろうか。また、永山の扱う東独難民向け住宅は、モデル住宅としてではなく、政府やアメリカからの資金援助のもと必要に迫られて建設された。しかし、東独難民の流入は一時的なものではなく一九五〇年代を通じて続いたため、市当局の住宅論議においても東独向け住宅の供給のあり方を議論する余地があった。その議論においてどのような改善が試みられ、理想が掲げられたのだろうか。

第三に住宅建設・都市開発と当時の社会・経済との関係である。たとえば、国の経済政策・経済理念という点では、森下の論文でとりあげる団地建設はチェコスロヴァキアの第一次五か年計画と密接に関係し、芦部の論文がとりあげる住宅計画は、ＳＥＤ指導部の住宅建設・都市計画の方針転換の後に練られた。当時の経済政策の方向性やその転換は住宅建設・都市開発の計画にどのような影響を与えたのだろうか。また、本特集で扱う住宅建設がいずれも公共的な要素を強く持っていることを

考えると、これらの住宅建設における公権力の関与の度合いが、当時の公権力の経済への関与のあり方に沿っていたのか否か、という点も考察すべき点であるといえる。さらに、本特集では紙面の都合上取り上げられなかったが、一九五〇年代が経済成長の時期であった点に注目すると、住宅供給の恩恵を受けた住民が、経済成長にどのように貢献したのか、といった点も論点となりうるだろう。

（ながやま　のどか・青山学院大学教授）

◇◇